

●背景

県が育成したシシトウ‘ししわかまる’は、遺伝的に辛みが全く発生しない全国初の品種であるが、慣行品種‘葵ししとう’と同様の栽培管理では草勢が弱くなりやすく果実品質も劣るため、収量および可販果率向上を目的とした栽培技術の確立が望まれている。

ここでは、整枝方法の違いが収量および整枝時間に与える影響について報告する。

●仕立て方法の検討

▶材料と方法

供試品種：‘ししわかまる’

対照品種：‘葵ししとう’

耕種概要

定植 2022年4月21日

畝幅 160cm 株間 70cm (栽植密度：893株/10a)

施肥 基肥 有機配合 5kgN/10a

追肥 55kgN/10a (‘葵ししとう’：25kgN/10a)

1回あたり1.25kgN/10aを液肥で施用

収穫期間：2022年5月24日～10月28日



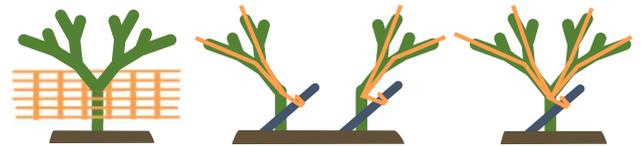
‘ししわかまる’栽培の様子
(4本仕立て、側枝放任)

▶試験区の構成

【整枝方法】

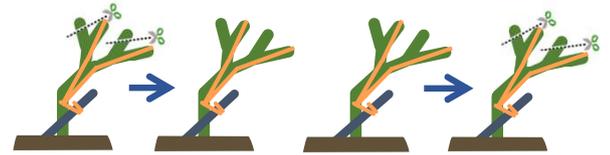
- ①/⑥: フラワーネットで固定し、主枝および側枝を放任
- ②: 2条で定植し、それぞれ2本の主枝を上から紐で吊り上げる
主枝先端から5節より下の側枝を3節で摘心
- 4本の主枝を上から紐で吊り上げ、
- ③: 8月下旬まで主枝先端から5節以下の側枝を3節で摘心
- ④: 初期(～6/30)の側枝を放任
以降、8月下旬まで主枝先端から5節以下の側枝を3節で摘心
- ⑤側枝放任: 懐枝・垂れ下がった枝のみ整枝

主枝 ———— : 誘引箇所 ———— : 支柱



①/⑥全枝放任 ②2条2本仕立て (条間 30cm) ③4本仕立て

側枝



③側枝3節摘心 ④初期放任

▶結果

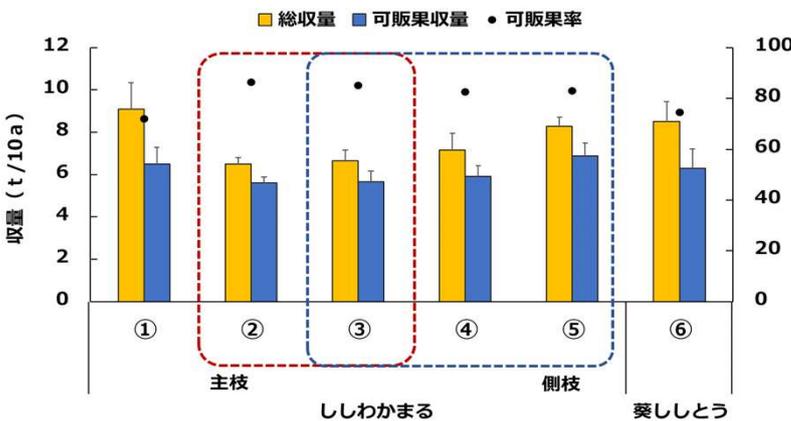


図1 主枝および側枝の整枝方法の違いが収量に及ぼす影響

エラーバーは標準偏差を表す

* 可販果率：総収量に対する、曲がりや凹凸のない秀品およびそれらの少ない優品(可販果)の割合

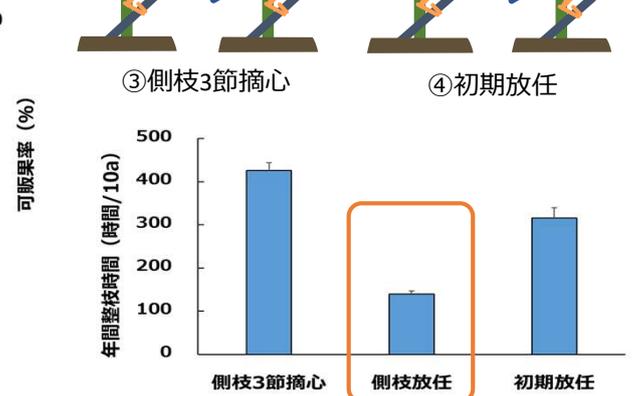


図2 整枝・誘引に要する時間

エラーバーは標準偏差を表す

* 年間整枝時間：1人で整枝作業を行った場合に要する時間 栽植密度(893株/10a)より算出

- ・主枝を誘引することにより可販果率が向上した。
- ・側枝を放任することで、総収量および可販果収量が増加し、慣行と同等以上となった。
- ・側枝放任では、整枝時間が他の整枝方法の5割以下となり、最も短かった。

●まとめ

‘ししわかまる’の主枝を誘引することにより可販果率が向上し、側枝を放任することで収量が増加した。また、側枝放任は容易で、作業時間も短いため、整枝を行うことによる負担は少ないと考えられる。

以上の結果より、‘ししわかまる’の整枝は、**主枝4本仕立て、側枝放任**が適している。